

大学のなかの神学部

清 水 義 樹



般大学と同じようにドンドン拡大されてゆく。神学部はよほどしつかりしておらないと、砂の上に建てられた建物のような結果に大学はなりかねない。

キリスト教主義大学はキリスト教が土台である。あまりに大学が大きくなりすぎてほとんど一般大学と違わないような様子になったときでも、キリスト教が土台であることに変わりはない。この土台がなくなれば、もはやキリスト教主義大学とはいえないから。従って神学部がキリスト教の専門的な学問の場であるかぎり、大学の中心的位置を占めることは当然である。

大学内にある神学部の位置を形式的に述べてみたが、もうすこし内容的に考えてみよう。神学部が大変特殊な学部であるということ、は、神学という言葉のとおり、神を学び語る場所であるからである。一体神を語ったり学んだりするということは、普通のことでは

私どもの国では神学部のある大学は、数えるほどしかない。また他の学部に比べると学生数も驚くほど少ない。ここから神学部は大学にとって必ずしも必要だとは考えられない、いわば刺身のつまのようなものにはすぎない、アクセサリーのようなものだという考えもおきてくる。私はこういう考えは信仰ぬきで考えればもつともだと思ふ。けれどもキリスト教主義大学であるかぎり、神学部はアクセサリー的なものではない。もし例をとれば建物の一番土台をなす杭のようなものが神学部である。地中ふかく埋められて頭だけが僅かに地面に出ている。この頭も何階かの鉄筋校舎をのせて見えなくなってしまう。いうまでもなくこの杭がしっかりしておらねば建物が大きければ大きいほど危険である。今日キリスト教主義大学も一

ない。神は全存在界の根元であつて、天地の運行から一羽の雀にいたるまで全部神の手のなかにある。無神論者も神の手のなかで神はいないということができるのである。このような神を語り学ぶということが、どういうことであるかということに厳しく追究するのが神学部である、神学も学問であるかぎり曖昧であつてはならない。

そうすると神を語るということがどういふものであるかを、簡単に考えてみよう。まず最初に神は論議できるものかどうかが問われる。一般の学問はその対象を分析しあるいは綜合して学問的組織のなかへ包みこむのである。ところがこのような学問的態度であつかわれる神こそが、偶像であつて死んだ神だというのが、キリスト教の主張である。さらして死んだ神を生きた神のように考え違ひをするのが罪の根本だといふのである。周知のようにフォイエルバッハは神は人間精神の投射だといつた。私どもが神を考えそれを分析するといふのであれば、それはいうまでもなく考えられた神である。考えられた神は人間頭脳の製作物であるから偶像である。考える私自身を殺し生かすきた神ではない。もし神学部が一生懸命神を論議しているばあい、このような偶像の神を作つていふとすると大変なことになる。このような神学部を中心にした大学が健康であるはずがない。神を語るということ、論ずるということはまことに厳しいのである。

もうすこしいかえると一般の学問の対象は相対界である。だから私どもも相対的態度でよい。ところが神は絶対者である。当然私どもにも絶対的態度が命ぜられる。このことは神を論議するものはいつでも論議する自分自身の存在がそこでその生き死にを決定される

ているということの意味する。神を神にふさわしくなくあつかうとき、私は審かれ亡ぼされる。あるいはひろげてこのように言つてもよい。私は神の手の外に立つことができない。私がその外に立てるような神は相対者にすぎない。神が絶対者であるかぎり、私は生存そのものを神の手のなかにおいている。従つて私が神をどのようにうけとるかで、私の生存が決定される。神の論議がそのまま私自身の存在を決定するのである。たとえば神を人格的と考えれば、それに対応して私も人格存在となる。神を盲目的意志あるいは自然力のようなものと考えれば、私の存在も自然法則に支配されまたは運命的必然のものにあることになる。

いずれにしても神を語るということは大変なことである。いつても論議する者そのものがそこで自己の生死を決定されてゆくのである。神学部を中心にしたキリスト教主義大学は、この神学部が正しく神を語つているかぎり岩の上へ建てられた学校である。そうでないばあいは、どれだけ外見は盛んであつても、雨がふり風が激しくなると倒れる。

二

神学部はあきらかに大学内の一学部である。また学生数も少ないので大学が特別に面倒をみねばならない。神学部は大学の内にあつて大学が経営するのである。けれども神学部はその存在の特殊性のために、大学の内にあつて大学の外にあるという面がある。大学は神学部を土台とし、また、神学部に照らして大学の在り方を反省せねばならない。たとえていうと聖書と教会のようなものであるかも

知れぬ。聖書は教会が作ったのである。けれども反対に教会は聖書に絶えず照らされて正しい教会であるように努力せねばならないのである。

こういう神学部の特異性を学問的態度の見地から考えてみたい。学問的態度は方法論といってもよいであろう。それはあつかう対象によつて規定される。まず学問的方法論を決定してそのなかへ対象をはめこむこと自体が、学問的とはいえない。学問は真理に忠実でなければならぬ。それは實在の眞の相をそのままに明瞭にすることであるといつてよい。今日の西欧の学問概念は、ギリシヤに由来すると考えられるが、ギリシヤの真理は存在者がその蔽をとつて在るものが在るままに顕になることを意味した。もつともギリシヤ人は存在者の本相を不変の形相とみなしている。變つてゆく現実の存在者を貫く不変の形相とその存在者の本質であり、それが学問の対象となるのである。そうすると当然そこでは見るといふことが重んぜられる。形は考えられるものでなく、見られるものである。プラトンのイデアのようなものも、見るといふ方向を極限までおしすすめたといつてよいのではないか。ギリシヤ語では見るといふ言葉がそのまま理論を意味している。ギリシヤ人は見ながら考えたのである。このようなギリシヤの学問的態度は一定の距離をおいて存在者を対象化し、冷静に観察するといふことになる。そして存在者の不変の本質なり一般法則のようなものを取り出す結果になる。大学でも神学以外の他の学問はほとんどこのようなギリシヤの学問的態度に結びついているといつてよいのではないか。もつとも例外はある。ある種の哲学などは、このような思考への反対を意図しているとい

えよう。

いづれにしても明らかなのはこのような存在者を対象化して観察する態度では、観察する主体は観察のなかにはいらない。まして観察する主体者を殺し生かす神は観察の対象となるものではない。しかも一番直接で確実なのは、観察する主体存在としての私自体ではないか。観察された私は物であつて、人格としての私ではない。人格としておたがい知りあうためには、我と汝とが心を開いて直接に話しあわねばならない。いくら私が一定の距離をおいて汝を観察しても、眞の汝の心の奥は知られない。これは原理的なことであつて、対象化の立場に立つ学問はどれだけ進歩しても対象化をゆるさぬ存在はそのものとしてあつかうことができないのである。

神学部はこのことを明瞭に自覚しているので、他の学問に対してその限界を明示することができるはずである。そして原則上次元の深いものが根本となりまた目的となると思われる。各々の学問の領域を犯すことなしに、その学問の土台となり目的が何であるかを、神学部はまた明瞭にできるはずである。もつとも具体的にこのことを実行することは容易ではない。今はただ原理的にそうなるはずだといふにすぎない。

×× ××

最後に神学部の積極的な主張をのべてみよう。一般の学問概念がギリシヤに源をもつとすると、神学部はヘブライに起源をもつている。ヘブライ人はギリシヤ人と正反対といつてよいところがある。知るといふことも、ギリシヤでは一定の距離をおいて対象を観察することであつた。知るとは見ることである。ところがヘブライ人

は距離をとび超えて直接に対象と交わりに行ることが知ることである。旧約聖書でアダムがエバを知ったというような行動的な知識である。我と汝との人格的交わりのなかで成立する知識であるといつてよい。さらに驚くべきことは、ギリシヤ人の全く知らぬ世界、いなイスラエル民族以外の何人も知らぬ世界を明瞭にしてくれたことである。真実の生きた神は神自身からの啓示によってだけ知られる。従つて人間が本来からもっている神観念はすべて偶像にすぎないことを暴露する。いわゆるモーセの十戒のなかの厳しい偶像禁止がこのことを明証している。どうして偶像を作つてならぬかという、それは神が超越者であり、不可視であり、靈的なものであるからだというのではない。このような思弁はイスラエル人のものではない。そうではなく神が自己を顕わすとき、自己を隠してあらわしたから偶像化してはならないのである。神は何の形をも見せなかつたから偶像を作つてはならぬのである。まことに驚くべき神理解というほかない。このように厳しく偶像を否定する神はまた世界の創造者である。しかも神は言をもつて万物を創造する。言によつて世界を創造するという思想は他の民族にもなくはないようである。けれどもイスラエル民族との関連は全く不明のようである。私は神が言をもつて世界を創造したということは、内容的にイスラエル民族の独自性を証すると考えたい。ここにイスラエル民族の中心が世界創造の神話などでなく、エジプト脱出、シナイ山の契約の出来事などの明確な歴史的事件であることが注目される。とくにシナイ山の十戒に具体化された神とイスラエルとの契約の事件は大切である。無力なこの民族を神は一方的な恵みのゆえに神自身の宝の民とされ

た。このような一方的恵みに基づく契約によつて神と民との間は責任的な関係となる。神と民との契約の責任関係から創造事実を照らし出すとき、言による創造となることに不思議はない。

言は単なる音ではない。それは呼びかけである。従つて神が言によつて世界を創つたということは、そのまま世界は神から呼ばれていることを示している。創造界は創られたことそのことによつて、いつでも神から呼ばれている。呼ばれているかぎり応えねばならない。神と世界とは呼応の関係となる。人格関係の基本はここにある。神と民との契約もこのような根元的な神と世界との呼応関係の一つの具体化と考へてよい。ここから全存在界の一番深いところは神と創造界との呼吸の責任的な倫理関係であるといわれる。いわゆる自然界はこのような根元的な倫理的世界の内て成立するのである。自然のもとに倫理があるのであつて、その反対ではない。キリストの十字架もこのような全存在界の倫理的な性格からよく解釈されるものと私は考へている。

聖書の開示しているこのような世界はまた歴史の世界であるといつてよい。行動的であり倫理的である。そしてここに全存在界が基づき統一されている。そうするとまた凡ての学問もここに最後の基盤をもつことになる。神学部がこのような聖書の告知した歴史的世界を明瞭にするかぎり、大学の他の学部に対して学問的にも役立ちうるはずである。もつともこのような歴史的世界の学問的形成は今後の課題であると私には思われる。

(神学部出身・関東学院大学神学部長)

同志社と讃美歌



竹内信

1

日本において新教の讃美歌が最初に歌われたのは嘉永六年（一八五三）のことであったといわれる。アメリカのペリー提督の率いる艦隊の旗艦上で日曜の礼拝が行なわれたが、軍楽隊の伴奏によって歌われた讃美歌の歌声が海岸まで響いて日本人を驚かせた。そのとき歌われた讃美歌は第五番の

こよなくかしこし わが主のみさかえ
よろずのくにたみ 目前にひれ伏せ

であった。もちろん、英語の歌詞 *Behold Jehovah's awful throne* で歌われたことは言うまでもないことである。

その後、外国宣教師が続々来日して伝道を行なうようになってからも、しばらくの間は英語のままに讃美歌は歌われていた。英語教育に力を入れていたキリスト教関係の学校な

どでは英語讃美歌の使用はかなり長い間続いたようである。高橋虔著『宮川経輝』には、明治九年一月三十日熊本郊外花園山で行なわれた熊本バンドの奉教誓約の際、まずゼーンズに教わった英語の讃美歌が合唱されたということが記されている。同志社や関西学院の校歌がまず英語で作られたということなど、こうした英語讃美歌歌唱の実状などを思えば当然のことなのであっただろう。

しかし、キリスト教伝道の対象は学生のみ

に限られるべきものではなく、英語を理解しない一般の人々にこそ重点を置かねばならぬのであるから、初期の宣教師たちは、非常な努力をもって日本人に讃美歌を提供することに苦心したのである。ペリーの艦隊に一水兵として乗組んでいたジョン・ゴープルはのち宣教師として来日したが、この人が日本讃美歌の誕生に重要な役割を果たすこととなった。すなわち明治五年（一八七二）、横浜で開かれた最初の宣教師会議に提示された二篇の翻訳讃美歌のうち一篇「There is a happy land」（讃美歌四九〇の原歌）の稚拙な日本語訳、

よき土地あります 大そう遠方
尊者榮華に立つ 日の出のよう
名挙げ高く 讃美歌せよ

はこのゴープルの手になるものであった。こうしたきわめて粗野な形のもを糸口として、だんだんと洗練された日本語の讃美歌が作られるようになって行った。日本における最初の讃美歌集は、明治七年（一八七四）四月、摂津第一基督公会（現神戸教会）用とし

て刊行された「讃美の歌」であった。収載されている八篇のうち五篇は創作歌であるが、

そのうちの一篇は松山高吉の作になるものであった。松山は越後出身の国学者であったが、キリスト教を探るために密偵となって宣教師に接したのが機縁となってキリスト教徒となった人である。讃美歌制作と聖書翻訳の面で日本の教会になした貢献はきわめて大きいものがあつた。同志社でははじめ教師であつたが、のち理事となつた。平安教会の牧師であつたりしたが、聖公会に転じ「古今聖歌集」の編纂にもたずさわつた。

松山の作になる讃美歌は現行の「讃美歌」に三篇入つている。

かみのめぐみ主イエスの愛（五九）
わがやまとの国をまもり（四一五）
み神のたましい心のたまを（四四〇）

五九番は東京靈南坂教会の献堂式の際作つたもので救いの宮としての教会がおおらかに歌われている。現行讃美歌においてこのうたに配せられている曲は、同志社出身の音楽家で、四十余年靈南坂教会のオルガニストを勤めている大中寅二の作曲になるものである。

2

最初の讃美歌集が出てから約三十年間は、教派的讃美歌の時代であつて、バプテスト、メソジスト、日基、組合とそれぞれの教派から思い思いの歌集が刊行されていた。場所も神戸、大阪、東京、横浜、長崎あるいは函館とこととなつており、各地に駐在する宣教師を中心として編纂されたのである。体裁も和紙和装、変態かなの木板本から、四〇〇篇以上の歌詞に本譜を付けた洋綴の堂々たる歌集にいたる種々なものがあつた。

こうした教派的讃美歌が、日本における讃美歌の発展の上に果たした大きな役割は認めねばならないが、一方、同一の歌でありながら翻訳がちがうために、他教派との会合で用いることができず、有効な伝道の助けとなり得ないことを痛感して共通で使用できる歌集が要望されるようになった。こうした要望に応じて出現した最初の試みは一致（日基）、組合両教会協力による「新撰讃美歌」（明治二十一年）と、組合、日基、バプテスト、メソジスト、聖公会の各派が協力して出来上つた「共通讃美歌」（明治三十四年）であつた。こ

の共通讃美歌は歌集ではなかったが、同じ歌詞と同じ曲とで各教派の信徒が歌い得る一二五篇の讃美歌のことで、各派の歌集にこれが採用されたのである。明治三十三年四月大分で開かれた福音同盟会の席上、この共通讃美歌作製を提議したのが、のちに同志社々長となつた原田助であつた。なお、この事業に當つた人のうちに同志社関係者として三輪源造、湯浅吉郎、松山高吉、湯谷礎一郎があつた。

讃美歌集作製における各派協力の氣運はいよいよ高まり、組合、日基、バプテスト、メソジスト、基督の五教派は協力して劃期的な合同歌集を出版するにいたつた。これが明治三十六年版の「さんびか」である。収載歌数四八三篇に及び、うち三七篇は特撰と称し、聖歌隊の合唱に適するもので、音楽的水準の高いものであつた。大多数は英米讃美歌の翻訳歌であつたが、邦人の創作歌も五四篇あり、日本讃美歌の発展の一段階を劃するものである。

共通讃美歌作製の時から活動を始め、この「さんびか」の編纂に當つては中心的な役割を果した三輪源造は同志社神学校の出身、長

く同志社中学や女専で国文学を教えた人である。彼の作になる讃美歌は数多いが、現行讃美歌に載せられているのは次の三篇である。

羊はねむれり草の床に（一一九）

きかずや明星さやかに語るを（四二二）

この世は花ぞのこともは花（四六六）

いずれも明治期の新体詩の傾向をあらわす優美典雅なものである。しかし、この世は花ぞの「において見られるように、用語も内容も流麗であるが、讃美歌に必要な福音的要素はきわめて稀薄である。この傾向はひとり三輪のみならず、明治三十六年版の讃美歌全体に見られるもので、近年讃美歌学者らによつて指摘され、改善を要求されている点である。

湯谷礎一郎は三輪源造、別所梅之助、マクネアの三者とともに明治版「さんびか」の編纂に功績のあつた人である。彼は日本基督教会側の委員であつたが、同志社神学校を明治二十四年に卒業、東京に出て日基派の下谷教会の牧師となり、のちに日本音楽学校の教授となつた。同志社在学中香川景樹派の歌を学び、歌人として知られていた。

世のなかにふみちようふみは（一八九）
み神を父とあがめまつりて（四三四）

この二篇が現行讃美歌に入れられている湯谷の作であるが、一八九番は三十一文字の短歌体である。日本人の作つたものとして当然に短歌体の讃美歌が多数作られたが、会衆歌として斉唱されるのに適さない詩型であるのか、よい曲が配せられず、だんだんと教が減つて行き、現行讃美歌においては、このうたと、四三七番の長谷川初音の母の日のうただけが短歌体の讃美歌として残つているだけである。日本詩歌の特長の韻律七五調の持つ平板さを嫌つて、近時の讃美歌においては、これとさらに七五調を避ける傾向が顕著であるが、こうしたことも短歌体排除の理由と見られよう。

同志社は日本讃美歌発展の初期に、松山高吉、三輪源造、湯谷礎一郎のごとき有力な人材を送つて大きな貢献をしたが、その後の讃美歌の進展に対しては主流的な役割を果すような人物を送り出してはいない。

3

明治三十六年版「さんびか」は約三十年にわたつて、日本の新教各派によつて使用せられ、教会生活を豊富なものにするともに、

福音伝道の強力な武器として大きな力を發揮した。ただに教会内のみでなく、一般社会において「さんびか」は広く普及し、西洋音楽導入の重要な役割を果たしたのである。

しかし、讚美歌は時代とともに進むものである。用語は生活とともに変遷し、神学思想も時代とともに変化する。信仰者の心のうたとして歌われる讚美歌はあまり時代ばなれのものでもあってはならない。どこの国のものでも大体二、三十年の間隔をもって、讚美歌集は改訂されているのである。わが国においても、昭和六年、昭和二十九年と二度の改訂事業が行なわれ、時代にふさわしい信仰のうたが提供されているのである。

昭和二十九年度讚美歌改訂の中心人物は、歌詞は由木康、歌曲は小泉功であった。改訂委員が挙げられ、旧版の検討、新資料の撰出等に参画したが、実際の作業に主として当ったのは上記の二氏であった。筆者もその時期に日本基督教団讚美歌委員会の委員に挙げられたが、改訂はすでに開始されており、事情もよく分らず、かつ関西在住のため委員会に召集されることも余りなく、改訂事業にはほとんど貢献することが出来なかった。ただ

依頼されてコスター（三八二）、シモンズ（四一八）の二英語翻訳歌を寄稿したにとどまった。

現行讚美歌に歌詞を寄与している同志社関係の作詞者に長坂鑿次郎がある。長坂は同志社中学校を卒業し、新潟・函館・岡山等の組合教会を牧したが、のち神戸女子神学校で教え、校長となった。新潟在住中、米国宣教師クララ・ブラウンと結婚、協力してこどものための讚美歌集「ゆきびら」を刊行した。こどものうたが乏しかった時代のこととて、大いに歓迎されて日曜学校などでさかんに用いられた。

ゆけどもゆけども（二四四）

現行讚美歌に収載されているこのうたは、長坂の死の前年八十歳の時のものである。人生の行路に行きなやみつも神の声をはつきりときいている信仰者の姿がたくみに描かれているが、八十歳にもなりながら、このような詩的情感の高まりを示し得た魂の若さに驚かされるのである。この讚美歌はヴァーン・ロスマンによって英訳され、一九六四年刊行された東亜キリスト教会議発行の E.A.C.C. Hymnal に掲載されている。

山路越えてひとり行けど（四〇四）

の作者西村清雄のことについては、同志社時報第六号に彼の甥に当る元東大教授高見顕治氏がくわしく書いていられるので、ここでは略すが、西村は同志社には数ヶ月在学しただけであったが、のち校友会会員になった。

くすしき恵みを受けたる民よ（四一六）

の作者山室武甫も同志社中退である。

のぞみの星のただひとつ（四四一）

は昭和三年から十五年間同志社大学で英文学を講じた舟橋雄の作である。

その翻訳歌が現行「讚美歌」に用いられている人に、三輪源造以外に、有賀鉄太郎（一三七）海老沢亮（二二六・二六五）、岩村清四郎（三八七）、竹内信（三八二・四一八）、魚木忠一（一六〇・二五三）らがある。

音楽の面で貢献した人も同志社出身者に数多くあるがここではただ歌詞作者のみに限った。初期の花々しい活躍にくらべて、最近同志社関係者の讚美歌に貢献する人が乏しいのは何故だろうか。若い人々の間からこの方面で活躍する人の続出することを切に希望するものである。

（昭四大神卒・香里ヶ丘教会牧師）